

第2758号

(第3種郵便物認可)

第2758号

子どもの つぶやき を生かす — 2

多賀 讓治

玉川学園MRC遠隔
教育推進室研究員

教室の中は私の声だけが響き、子どもたちは受け身の姿勢でそれを聞いている。さっきまでの活発なやり取りは影を潜め、私ひとりだけが焦りながら喋りまくっている……。子どもの疑問に答えるのではなく、教師の思惑で授業を進めようと

行き詰まったら戻る勇気を

した結果の出来事である。

延々と続く松林は、庄内平野を冬の飛砂害から守る砂防林であり、日本一の大地主と呼ばれた本間家3代光丘などの手によって江戸時代に作られた。授業目標は、品質に優れた庄内平野の米作りの基盤に本間家が大きく関わっていることを理解させることにある。

相模から移ってきた本間氏は酒田に根を下ろし、地

主として農業経営に成功し、やがて藩の財政再建に力を発揮するが、その柱ともいべき事業が海岸線に作られた黒松の林である。冬の季節風がもたらす海からの砂は一晚で数十センチから1メートルを超える凄まじさで、砂のために消えてしまった村さえある。

最大の山場は、この砂防林がどうして作られたのかを気づかせることである。すでに藩が困窮した理由の1つとして「砂の害」があったことを説明しておいた。その上で海岸線の航空写真を示し「ここに林があるのはなぜか？」と発問した。子どもの疑問に気がつ

いた私は、さっきのところまで戻り「その砂はどこからくるのかなあ？」と発問をやり直した。すると子どもたちが再び動き始めた。「季節風ってそんなに強い……」「海からどうやって砂が湧くの？」

か、この新たな展開で、子どもたちは季節風に乗って飛んでくる膨大な砂による被害を具体的なイメージとして焼き付けることができた。こうして子どもたちは本間光丘らの献身的な努力を理解し、同時に行っていた乾田化事業、農家の収入安定化など数々の事業についても予想が付けられるようになった。15分のロスは口スではなくなったが、あのまま授業を続けていたら、未消化で理解度も低かったに違いない。

「授業が行き詰まったときには、思い切ってその分岐点まで戻ってやり直す」と。肝に銘じた教師時代のほろ苦い思い出である。

教育新聞

発行所 教育新聞社
〒110-0005
東京都台東区上野3-17-7
代表 電話 03(3832)3571
FAX 03(3832)3570
URL <http://www.kyobun.co.jp>
E-mail kyoiku@kyobun.co.jp
購読料 2625円(月額、税込)
振替口座 00170-6-4369
©教育新聞社 2008
週2回 月・木発行